

# AFTERNOON TEA

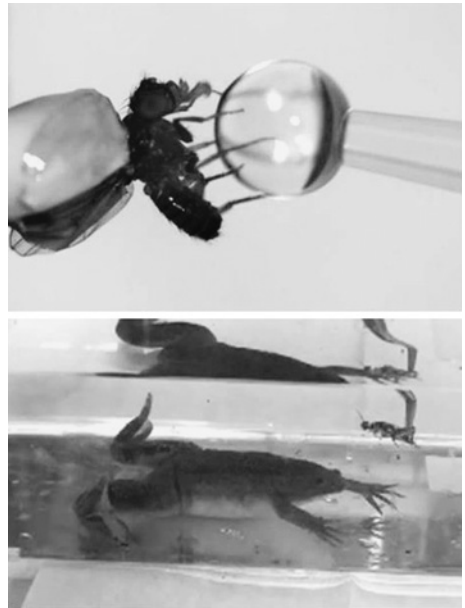
奥羽大学歯学部

古山 昭

齋藤茂先生よりバトンを受け取りました。私がカエルの機械性侵害受容に関わる TRP チャンネルに興味を持っていた折に、脊椎動物 TRP チャンネルの進化と多様性に関する論文 (Saito and Shingai, 2006) を読み、2010 年の生理学会で色々と質問したのが齋藤先生との縁の始まりで、それ以来共同研究をさせて頂いております。

幼少時の私は岡山で育ちました。小学校に必ず一人はいる「虫博士」で、人が嫌いそうないろいろなムシ (虫が三つくっついた漢字の方) を捕まえてきては、自分の部屋で放し飼いにしていました。父は無機固体化学の研究者として岡山大学理学部に勤務していましたが、無機物でできた固体を相手にしている人でしたから、有機物でできたちよろちよろ動く物体には生理的な嫌悪感を示しつつ、子供の性癖を見守ってくれていました。母親の方は、私がひきおこす様々な出来事を楽しんでくれていたようです。ヤマカガシやシマヘビ、アシダカグモなどを捕ってきては逃がして家族や近所の奥様方を恐怖させていた私ですが、私が不在の折に隣家で蛇が発見された時は、母親が私の代わりに「息子のペット」を捕まえに行ったこともあります。有り難いことでした。

将来は生き物 (人間以外の) に携わって生きていくであろうと自他共に認める岡山時代を過ごしたのち、東北大学理学部生物学科へ入学。そこで、一年生から研究に参加できるという「プレゼミ」の存在を知って訪れたのが、教養部でハエの摂食行動を研究しておられた嶋田一郎先生の研究室でした。私が任された実験は、センチクバエという大きなハエの頭をちょん切って白金製の不関電極に固定し、口器に生えている味覚毛にガラス微小電極を刺入して味覚神経応答を測定するという



「味覚班」の仕事でしたが、結局それを大学院博士課程まで続けることになりました。博士課程で私が選んだ研究課題は「ハエの糖餌と蛋白質餌の味覚識別」。ハエの味覚器は単純な構造で、味の符号化様式も単純化されて理解されています。しかし、感覚器の応答からは、ハエがなぜ、砂糖と肉の味を区別できるのかはわからず、神経系には何か未知の情報符号化様式があるのでは、と思ったものでした (その謎は 20 年経った今でも未解明のままです)。来る日も来る日も、苦勞して扉を 1 つ開けたと思えばそこには壁しかないような状態で、視界が開けず、迷路をさまよう日々でした。ところで、ハエの摂食行動研究の世界には Vincent G. Dethier という大物がいます。私が研究生生活を始めたのと殆ど同じ時期、1993 年に彼は亡くなって

しましたが、1973年に「The Hungry Fly」という名著を残しました。ハエの摂食行動に関する膨大な研究をまとめたその本では、ハエの蛋白質餌の味覚識別についても一章が割かれています。五里霧中の研究生活の中でその文章を読み込むと、あのDethierも実は私と同じ迷路を歩み、私と同じことを彼も考えていたことが伝わってきました。まあ、Dethierの研究は泥沼の一本道ではなくいくつもの枝道を広げていたため足を取られることはなかったようですが、それでも時空を超えて、同じ謎に挑んだ者同士、気持ちが通じた気がしたのです。自然科学に携わる者の第一の喜びとは、天岩戸に隠れた天照大神様（＝自然界に存在する何らかの真実）に、手練手管の限りを尽くしてお出まし願うことでしょうか。ただ神様は顔を見せてくれなくても、一人孤独に舞う研究生活のなかで、時空を超えて一緒に舞う魂を感じられるような瞬間も、研究することの喜びの一つではないか、と思ったものでした。煮詰まっている中、ボスの嶋

田先生をはじめ、ハエ研究者の先輩方には随分とお世話になり、心配もかけたと思います。今でもサポートを惜しまない研究仲間のお世話になりながら、早く研究で恩返しを、と思いながらあっという間に不惑を越えてしまいました。

最後に、現在の私の研究ですが、①ハエ摂食行動の神経行動学（ショウジョウバエをモデルに味覚障害の研究はできるか?）、②ハエの味覚神経を用いた受容体の機能解析システム開発、③カエル痛覚過敏誘導機構の解明、といったところです。地方私立歯科大の教員という身分では、教育業務が圧倒的に多くて研究にかけられる時間もマンパワーも限られています。しかし、有り難いことに、運良く研究課題を自分で選ぶ自由だけは確保できています。田舎の裏通りの小売店かもしれませんが、一応は自営業者のような気持ちで、研究仲間の助けを借りながら、日々ゆっくりと研究にいらしているところです。



島根大学医学部環境生理学講座

松崎健太郎

高知大学医学部解剖学講座の内田有希先生からバトンを受け、執筆させていただくことになりました。島根大学医学部環境生理学講座の松崎健太郎です。私は2007年4月から本講座に赴任し、現在は温熱生理学（体温調節）に関する研究に主として取り組んでいます。内田先生は中国・四国地方に住む体温調節研究者仲間として生理学会や他の関連学会などでお世話になっています。

さて、私が住んでいる島根県出雲市には出雲大社があります。出雲大社は縁結びの神様として知られる大国主大神（おおくにぬしのおおかみ）をまつる神社ですが、今年は60年ぶりとなる平成の大遷宮（御神体を本来あったところから移し、社殿を修造し、再び御神体にお還りいただくこと）が

行われたこともあり、多くの観光客が訪れています。私はもともと出雲地方どころか中国・四国地方にはまったく縁もゆかりもない人間でしたが、大学院生時に本講座の紫藤治先生・橋本道男先生らと共同実験をさせていただいたことが、本講座ならびに出雲地方とのご縁のはじまりでした。共同実験をしていた当時は実験の合間に何度か出雲大社に赴き、参拝・観光をしておりました。今にして思えば、あの度重なる参拝がご利益として発揮され、本講座へ赴任することにつながったのではないかと考えられなくもありません（周りからは「凄いいじつけだね」といわれますが）。

出雲には「因幡の白兔」という故事があります。これは、サメに毛皮を剥がれ、さらに意地悪な神

に欺かれて苦しんでいたウサギを大国主大神がガマの穂を使って治した（ガマの穂には抗炎症作用があります）という神話ですが、この故事から、大国主大神は医の神様とも云われ、出雲を医療発祥の地とする説もあるようです。この神話にちなんで、島根大学医学部附属病院ではウサギがガマの穂にくるまっている姿をシンボルマークとし、開設時より使用しています。一方、旧暦10月のことを一般には神無月といいますが、出雲地方では神在月（かみありづき）と呼びます（ちなみに本稿執筆時は10月でした）。これは、全国の神様がこの時期に出雲に集まり、会議（？）をするためといわれています。神在月の出雲の各神社では「神迎祭（かみむかえさい）」に始まり、「神在祭（かみありさい）」そして、全国に神々をお見送りする「神等去出祭（からさでさい）」が行われます。出雲では神在祭のときに、「神在餅（じんざいもち）」を振舞ったりお供えしたりしていたそうですが、その「じんざい」が独特の出雲弁で訛って「ずん



島根大学医学部附属病院のシンボルマーク

ざい」、さらには「ぜんざい」となり、他の地域に伝わったといわれています。このほかにも出雲には多くの歴史的建造物、神話・伝承や物事の発祥となるようなエピソードがある魅力的な土地です。ありきたりな出雲の宣伝になってしまいましたが、これからもお世話になっている多くの方々のご縁を大切にしながら、医の神様がいる出雲の地で、世界に向けて発信できるような研究を志したいと考えています。